



# 月刊 千葉労働

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号(動力車会館)  
電話 (鉄電) 千葉 2935・2936 番  
(公) 043 (222) 7207 番

93.8.4 No. 3838



# 55年体制とは何か! 成立の背景と崩壊の要因

自民党の分裂、七月衆院選での自社両党の惨敗という戦後政治の画期点について、自民党や体制側からも「五五年体制」の崩壊が叫ばれている。ところが「五五年体制」とはいったい何んだったのか、その成立の背景なり、果たしてきた「役割」といった肝心なことについての言及はマスコミも含め皆無といつていい状況である。

そこで今号では、戦後の国家、政治、経済等の枠組みをなしてきた「五五年体制」について歴史的背景、それを成り立たせた条件などについて検討してみたいと思います。

## 「五五年体制」 成立の背景

一九五五年という年は敗戦日本の戦後史の画期をなした年である。

## (政治的には)

自由党と民主党の保守合同と左右社会党の統一による、いわゆる「二大政党制」がスタートした時である。その直接の原因は、五四年保守両党が改憲案を発表したため改憲が大きな争点となり「二度と戦争を繰り返すな」という労働者大衆の怒りの反響を引き起こし、その結果自由党は大きく惨敗し、保守二党のうちどちらか一党だけでは多



55年体制はこうして生まれた=1955年の保守合同大演説会

数派をつくれなくなる。このピンチを脱するため保守合同へと進み、自由民主党の結成へと踏み切り、その返す刀で反共主義を掲げていた社会党を引きこみ「二大政党制」の確立へと進むのである。

## (その背景は)

日本の独占資本は、一九五四の朝鮮戦争で生じた「特需景気」で一気に活気づき「再建」の糸口をつかんでいく。その一方では民間運動買収の動きをいちだんと露骨に行っていた。日本支配階級は、こうした歴史的条件に見あった政治支配体制の確立が急務となり「五五年体制」を生みだしていったのである。

## 「五五年体制」の歴史

一九四五年の敗戦直後、政府も、個別資本も全産別的に巻き起こる闘いになんら対応策をもたなかったが一九四七年、二・一スト庄殺と四八年七月の政令二〇一〇公務員のスト権禁止で立直りのキッカケをつかみ以降

労務政策に本腰を入れる。こうした中で四八年四月に日経連を結成、五〇年にはレッドパージを強行しながら、朝鮮戦争を推し進めるために民間の買収に全力をあげていくが、戦闘的労働者はそれに屈せず「五五年体制」に流れこんでいくのである。

## 「五五年体制」を 成り立たせた 三つの条件

一九五〇年から六〇年代を通じて実現してきた戦後の発展、つまり「五五年体制」を成り立たせてきた三つの条件(高度経済成長、戦後民主主義、日米関係)は、七四年の不況を境にして曲がり角に立ち、八〇年代をむかえるや戦後的存立条件をこごとく喪失し、国家としての展望喪失状況にたたされ、ついにはバブル崩壊、長期不況と政治危機への突入という中で「五

五年体制」は土台から崩れ去り、本年六月最終的に解体し去ったのである。

## 新たな 反動的政客再 編を許すな

七月二十九日社会党など八党派の党首会談によって日本新党・細川を首班とした連立政権成立が正式に合意された。三十八年間一党支配をほしひまにしていた自民党はついに野党に転落した。

それでは、細川次期政権は自民党よりましな政権なのか。全く否である。そのことは、小沢の「国家改造」路線を見れば一目瞭然である。彼は、その中で公然と「首相権限を独裁的にふるうリーダーシップの強化のための制度改革をやる必要がある」とまで言いきっているのである。

この道は、改憲と侵略戦争の道でなくてはならない。この反動的な政治再編の逆流を何ともしも断ち切らなければならぬ。「五五年体制」崩壊と新たな反動的な政治再編は、逆に労働者大衆を決定的に揺りうごかし、たたかいは避けられない。

闘う労働運動の真価を發揮するのは、まさにこれからである。